

きょう、ママンが死んだ。きつと、そのはずだ。

この日記を書き出す前に、ほんの少しだけママンについて説明しておこう。私しか読まないとは思うけれど、いずれ私もママンを忘れて、この日記が何を話しているのかまったくわからなくなってしまうかもしれないから。ママンは、ここから二十五ノルムほどはなれた町の出身で、十九才くらいのときに私を生んだらしい。これを書いている今の私より、たった六才だけ年上で子どもがいたのだから、おどろきだ。髪はきれいなブラリアで、背は高くないけれどずらつとしている。なのにはっぺたがやわらかくて、笑うと少しだけふるえる。私たちの町の外れにある工場で仕事をしていて、朝早くに出掛けて日が沈む頃に帰ってくる。

私はママンが働いているところを見たことはないけれど、大変働き者だと同じ工場に勤めている近所のおばさんがいつていた。同時に、母親一人で子どもを育てるなんて大変ね、といっていた。その大変ねという言葉聞きながら、親が一人だと大変なのかと今さらになつて気

がついた私がいた。そういえば、他の皆にはパパンというものがあるらしいと思ひ出した。出した。

そんなこともあったから、パパンはどんな人、と前に一度だけママンに聞いてみたことがある。ちょうどいつものリビングに夕食を並べ終わつたママンは、テーブルのランタンのオルレでほっぺたを染めて、いつも通りの笑い方をした。そうして、それはあなたのパパン、それとも私のパパン、と聞き返した。私は、もちろん私のよ、と答えようとしてやめた。ママンは笑っていたし、私も怒つてなんていなかったけど、それを声にした瞬間ランタンの灯りが消えて、ママンがどこかへ行ってしまうように思った。

ある朝、ママンはいつも通りに朝食を作り、私に書きおきをして家を出た——出たらしい。(らしいというのは、私はそのとき眠い目をこすりながら目玉焼きをすすっているところだったからだ。)いつてくるわね、とママンがいったから、私も口から目玉焼きをこぼさないようにしながら、いつてらっしゃいと答えた。いつも通りのことだ

ったし、きっとこの一日もいつも通りの一日だ、と思っていた。

本を読んだり、絵を描いたりするのにもあきてきた昼下がりには、突然家のドアを誰かが叩いた。ママンが帰ってくるには早すぎる時間だった。少し身構えながらドアを開くと、近所のおばさんがウルガのように荒く息をはきながら立っていた。そうして私を見たかと思うと、突然おばさんは私をだきしめて泣きくずれた。そうして彼女は私にこう伝えた。

あなたのママンが、亡くなったのよ、と。

その夜、ママンはいつもと変わらず帰ってきた。そうしていつも通り私とママンの二人分の夕食を用意してくれた。リビングの灯りの中に私とママンの二人だけが取り残されて、世界中が消えてしまったような気さえた。ママンは私にいつも通りのやさしい声で、お食べ、という。そうしたら私は急にお腹が空いてしまったように、いただきますという言葉もそこそこにお皿に手を伸ばす。

それをママンはやわらかく笑いながら眺めている。美味しい、とママンは聞いた。おいしい、と私は答えた。

聞きたいことは山ほどあった。パパンのこと、私のこと、そしてママンのこと。でも、聞いた瞬間にママンが消えてしまいそうな気がして、結局私はママンを見ないようにしながら、お皿の模様を目でなぞっていた。

あなたはいつもそうね、と不意にママンがいった。驚いて私が顔をあげると、ママンの顔があった。ママンは、私の顔をのぞきこんでいた。あの笑顔だった。あのね、とママンが話し出す。あなたは、もっと聞きたいことを聞いた方がいいわ。したいことをしてみたほうがいいの。それで後悔もするけど、しなくてもきつと後悔するんだもの、だったらしてみてもいいんじゃないかって。

ママンはまだ笑っていた。私は何だか泣きたくなかった。私が聞きたかったことも、全部ママンはわかっていた。きつと、聞かれるのを待っていた。私は何かが怖くて、それを拒否してきたのだと、そのとき分かった。でも、何が怖かったのだろう。考えているとだんだん涙も我慢できなくなつて、ついに私は泣き出した。ママンは、そ

んな私を撫でてくれた。ほっそりとした、やわらかい手だった。それでもいいの、とママンは笑っていた。

私はママンにベッドまで連れていってもらって、久しぶりにママンと二人で寝た。目を閉じるのが怖かったけれど、ママンがそばにいてくれるのが感じられて、嘘のような、それでいて素敵のような気持ちだった。

気がつくと朝だった。一人でベッドから起きて、リビングまで来ると、机の上には目玉焼きなんて乗ってなくて、たった一枚の書きおきだけがおいてあった。ただ一言、いつてきます、と書かれたママンの文字を見ながら、きつとまた会えるのだろうと思った。いつになるか分からないそのときを思いながら、私もたった一言だけ、いつてらっしゃい、とつぶやいた。